妖精の家族

瑠璃奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖精の家族

【Ｎコード】
Ｎ４８９０Ｎ

【作者名】
瑠璃奈

【あらすじ】
オレンジ色の髪に緋色の目の少女、神崎紗莉亜。
その奇妙な髪と目のせいで、学校で友達も出来ず一人孤独な日々を送っていた。
「人間なんて、信じられない」
そんな少女はある日突然、異世界にいってしまう。
そこで少女が出会ったのは、皆が家族のように仲のいいギルド「フェアリーテイル」。
フェアリーテイルの者たちは、誰も紗莉亜の事を拒まずそれどころ

か、仲間のように慕ってくれる。
はじめは孤独に生きようと思っていた紗莉亜だけど・・・？

プロローグ

このつまらない世界を変えて欲しい。

何度そう願っただろう。

ねぇ、誰か教えてよ。

この世界がある意味を。

何故？

何のために？

このつまらない世界があるのだろう？

もしかして、生きているだけ無駄なんじゃないか？

いや、死ぬ事すら無駄かも。

考えるだけ無駄なのかな？

もう何もかも嫌。

だから強く、何度も願った。

何度も何度も。

叶わないだろう。

願うだけ無駄。

そう思っていた。

それでも・・・

何かを期待して、

何か起こるんじゃないかって思って、

何度も何度も願った。

そしてある日・・・

私の願いは叶った。

全ての始まりの日

「人生ってそんなに楽しい？」

いつだったか、友達に聞いてみたことがある。
まぁ、友達と呼べる関係ではなかったと思うけど。

「えぇ～、何言ってんのぉ？いきなりどうしたの？楽しいに決まってんじゃん！
友達いるし彼氏とかもいるしさぁ～。まぁ、家族だってうざいけどいた方が楽しいし。
好きなもの買ったり、好きな事したりできるし！」

家族？友達？
この子は何を言っているんだろう。
私にとって彼女が言った事はすべてつまらないものにしか思えない。
というよりも、私にはそんな物があった事なんて、無い。

私は好きな物も好きな事もあまりない。
学校は一応行っていたけど、ほとんど何もしない。
部活なんかも入ってないし。
ただ、本を読む事と歌う事は好きだった。
それだけは心が安らぐ。
でもそれだけ。
それ以外には興味なかった。

家族？そんなもの私は知らない。
父も母も死んだ。
私は一人。

幼い頃に事故で死んだって。
だから、家族の暖かさなんて知らない。

本当の友達も彼氏もできたことなんてない。。
周りの人は少しでも違う人を受け入れようとはしない。
人より冷めた考えだし、何にも興味を示さない。無口。
ううん、それも少しあるかもしれないけど、周りが私からはなれる理由は私の髪と目。
私の髪の色は黒じゃなく、鮮やかなオレンジ色。
それに私は両目の色が違う。いや、普段は両目とも同じ緋色だけど。
まぁ、目の色が緋色って時点で他人とは違うけどね。
私が怒ったりすると左目の色が変わる。私が強い感情を持つとその感情に合わせて様々な色に変化するらしい。
それに加えて、元々の左目もまるでガラスのように透き通ってる。
まぁ、これだけ変な条件が揃ってれば嫌われるのも当然。気にしないけど。
こんな私だから周りにはさけられ、
時にはいじめられた事もあった。
でも別に、勝手にやってればって感じで相手にしなかったらおさまっていった。
いや、正確には変わってないのかもしれない。

いじめても面白くないと思ったらしい周りは、
次に私の存在を無視し始めた。
まぁ、それはそれでかまわない。
私も関わるつもりは無かったから。

今は学校にすら行っていない。
行くだけ無駄。
外に出るのは一ヶ月に一回ぐらい。

それで困らない。
なぜなら、私の家には食料の保存スペースが腐るほどあるから。
それどころか、お風呂もキッチンも何もかもがでかかった。
部屋も、数えきれないんじゃないかって程ある。

まぁ、世間一般で言う大豪邸ってやつ。
それも、現代の日本では有り得ない位の大きさ。
でも、幸せだなんて思わない。
その広い家で一人で暮らしてる。
まぁ、別にそれほど嫌じゃない。
もう慣れたし。

学校に行かず私が何をしているかと言えば、家の探索である。
さっきも言ったけど、この家は部屋が数えきれない程ある。
地上部分でも多いのに、地下にはそれ以上あるんじゃないかな？
その一つ一つを見ていると時間がつぶれる。
それぞれの部屋にはなんだか分からない本や物がたくさんあった。
それらを見て回るのは意外と楽しい。
この家の物すべてを見るのにどれだけかかるのかな？
そう思っていたのに・・・
考えるだけ無駄だったのかも。
なぜなら・・・

あの日以来、私がこの家・・・いや、この世界に帰ってきた事は一度も無いから。

その日は、いつもと何も変わらない日だった。
いつものように部屋を回って時間をつぶす。
もう地上部分の部屋はすべて回った。
一ヶ月ほど前から地下の探索に入ってる。
地上とは桁外れの広さで、一ヶ月かかってもまだ五部屋しか回れてない。
昨日やっと五部屋目を見終わったところ。
今日から新しい部屋だなぁーと、少しだけ楽しみにしてた。

昨日の一つ隣の部屋のドアノブに手をかける。
ふと、目についたのはドアの右下の絨毯。
「よくみると・・・ここだけ他に比べて古い・・・？」
気になったから、屈み込んで観察してみる。
その絨毯は他よりも、明らかに擦り切れていた。
それによく見ると、ちょうど四角型につなぎ目みたいな物がある。
試しに剥がしてみようとすると、
「っ！？」
それは簡単に剥がれた。
そこから出てきたのは・・・
「隠し戸・・・？」
大人が一人ギリギリに入れるくらいの扉。
さらに、扉を持ち上げるとさらに下に伸びる階段があった。
先は見えない。
一瞬どうしようか迷ったけど・・・
「こんなところ見つけて、行かない訳ないよね？」
やっぱり降りる事に決定。
とりあえず一度上に戻って、懐中電灯を取ってこよう。

上に戻り、必要な物を取ってまた戻ってきた。
改めて下をのぞく。
「暗・・・」
まぁ、ぐずぐず言っても仕方が無い。
心を決めて降り始める。
階段は下っても下っても下に着く気配はしない。
「一体どこまで降りれば・・・」
いつまでも続く階段に嫌気がさして気を抜いたそのとき・・・

ゴトッ！

誤って懐中電灯を落としてしまった。
あわてて追いかけるけど、階段を転がり落ちるスピードに追いつけるはずもなく・・・
せめて明かりが付いたままならって思ったけど、転がる途中で電源が切れたみたいで明かりは見えない。
さらに悪い事に、暗い中階段を駆け下りたら、そりゃあもう、踏み外す可能性大な訳で・・・
当たり前のように私はそのまま下へ落下。
かなり距離ありそうだし、このまま転がり落ちたらヤバいなぁ・・・
とか思ってたけど。
「あれ・・・？」
階段を転がってるはずなのに、何故か痛くない。
っていうか転がり落ちるって言うより・・・
「滑ってる？」
そう。いつの間にか階段は滑り台になってた。

・・・だったら最初から滑り台でいいじゃんよ。
階段だった意味無くね？
誰だよ階段にした奴。

くだらない（私に取っては重要な）事を考えながら滑ってたら、
ドスン！！
どうやら下に着いたみたい。
・・・長かったぁ。やっと終わったよ。
とりあえず立ち上がろうとしたら、何かを踏んで転んだ。
足下を見てみると、さっき落とした懐中電灯が。
壊れてないか確かめたら、明かりは付いたから大丈夫みたい。
気を取り直して前方に明かりを向けると、そこには古い扉が。
何の躊躇も無く扉を開けるとそこにあったのは・・・
「何、これ・・・？」
見た事の無い物が、そこら中に散らばっていた。
「これは・・・眼鏡？こっちはペン・・・」
そこにあるのは、自分の知っている物のようで、でもどこかが違う。
それに何より、そこら中に散らばっているのは大量の水晶。
色・形・大きさがバラバラの水晶が、あちこちに転がっている。
一つ手に取って観察してみた。
・・・ん？
「これって・・・」
自然と手が左目に伸びていた。
その水晶は、まるで私の左目と同じ感じがする。
・・・まさか、ね。

とりあえずライトの明かりしかないから、そこら辺の物は上に持って行って調べよう。
そう思って持ってきたバッグに、さっきの眼鏡やらペンやらを入るだけいれた。
水晶は一番多めに入れといた。
「さて、とりあえず上に戻るか。・・・ん？」
そこで私の目に入ったのは、机の上に置かれ埃をかぶった一冊の本。

とりあえず手に取ってみて、埃をはらう。
題名は・・・もうかすれていて読めない。
とりあえずページを開いてみる。最初のページに書いてあったのは・・・
「魔法陣・・・？」
いろんなジャンルのいろんな本を読んできたから、これが魔法陣だろうという事はわかる。
でも、今まで見てきた魔法陣には少しだけど共通点があった。
でもこれは・・・全然違う。
「一体誰が書いたんだろう・・・」
そう思いながら、魔法陣に触れてみる。
ただ触れただけ。
それだけなのに・・・

その瞬間、

私は意識を・・・失っていた。

ここは・・・異世界？

「・・・ここ、どこ？」

目が覚めたら知らない場所で寝ていた。
目に映ったのは見慣れたいつもの天井ではなく、まったく見覚えのない天井だった。
体を起こして周りを見回してみても、まったく知らない場所。
部屋の壁、家具、絨毯、そして今自分が寝ているベット…
どれをとっても、あの無駄に豪華な屋敷のものとは違っていた。

「・・・なんでこんなところに」

自分がなぜこんなところにいるのか思い出そうとしてみる。

「確か、家の探索をしてたら地下を見つけて…」

そこにあった部屋で、様々なものを見つけた。
その中の１つの本を見たところで突然眩しい光が・・・

「気絶していたのかな…」

それにしたって妙だ。だったら自分は今あの地下の部屋にいるはず。
屋敷には誰もいないから、誰かが自分を運ぶなんて事はありえない。
ありえないはずなのに、ここにいる。
一体何が…

ガチャ

突然部屋のドアが開き、一人の女性が入ってきた。

「・・・あんた誰？」

少し失礼かとも思ったけど、そのまんまの質問を言う。
その女性はこっちを見て驚いたような顔をしたが、すぐに笑顔に戻り

「よかった、目が覚めたのね」

と言って来た。

「…質問の答えになってない。あなたは、誰？」

もう一度同じ質問を繰り返す。
すると今度は答えが返ってきた。

「私の名前はミラジェーン。よろしくね。あなたは？」

ミラジェーン？不思議な名前。というか、日本ではありえない名前。
それによく見ると、髪の毛の色も黒ではなく、正反対の白だった。
白といっても、白髪のような白ではなく、もっときれいな白。
そんな色、普通じゃありえない。・・・人のこと言えないけど。

「あの・・・」

一人で考えてたら、ミラジェーンと名乗った女性がまた声をかけてきた。

「あなたは？」

「え？」

「あなたの名前」

あぁ、そういえば聞かれてたな。

「・・・神崎紗莉亜」

「カンザキサリア？・・・変わった名前なのね」

あんたが言うか？

「わたしにとってはあんたの方が充分変わった名前なんだけど」

「ごめんなさい。馬鹿にしたつもりはなかったの」

・・・変な奴。

っと、それよりも・・・

「ここはどこ？なんでわたしはここで寝てた訳？」

一番気になっていたこと。

ミラジェーンと会話してる間も考えてみたけど、やっぱり思い出せない。

「・・・覚えてないの？あなた、ギルドの前に倒れていたのよ。それをルーシィ達が見つけたからここに寝かせていたの」

「・・・ルーシィ？」

また知らない名前。

「ルーシィは、ギルドの仲間よ」

「ギルド・・・？」

ギルドって・・・中世より近世にかけて西欧諸都市において商工業者の間で結成された各種の職業別組合のこと？
そんなもの、今の日本にあるわけない・・・というより、世界中どこを探してもないと思う。

「・・・ここどこ？日本じゃないよね？」

日本以外にいるなんて可能性はないと思うけど・・・
ミラジェーンとかルーシィなんて人が日本にいるとも・・・

「ニホン？どこそこ？ここはフィオーレ王国の東にある町、マグノリアよ」

「フィオーレ王国？マグノリア？」

そんな地名聞いたこともない。地理に関する本ならかなり読んだけど現在にも過去にもそんな国はなかったはず。

「・・・本当に何も分からないの？もしかして、記憶喪失か何か？」

「記憶ならちゃんとある」

「そう、ごめんなさい。それじゃあ・・・あなたはどこから来たの？なぜギルドの前に？」

「私は日本の東京にいたはず。なんでここにいるのかは私が聞きたい」

「トウキョウ？」

・・・どうやら彼女は分からないらしい。
本当に、日本じゃないのか・・・？
でもそれなら、一体どうやってここに・・・

話を聞けば聞くほど分からなくなる。
フィオーレ王国？ギルド？
なにそれ。

「マスターなら何か知ってるかもしれないけど・・・」

「マスターって？」

「このギルドのマスターよ」

マスター・・・ってことは、一番偉い奴か。
そいつなら知ってるかも…

「そのマスターに会わせてくんない？」

「・・・わかったわ。ついてきて」

マスターのところに向かう途中でも、ここは日本ではないと何度も思った。
廊下の造りとかが日本のものじゃない。
というよりも、どこの国の造りかがまったく分からない。
現代の日本は洋風の造りが多いけど・・・それとも違う感じ。
本当にここはどこなんだろう。

「ついたわよ」

いつの間にかマスターの所についていたらしい。
・・・って

「マスターってどこ？」

周りを見回してもそれらしき人が見当たらない。

「いるじゃない、あなたの足下に」

「え？」

慌てて足下を見ると・・・

「よぉ、はじめましてじゃな」

そこにはめちゃくちゃちっちゃいお爺さんがいた。

「・・・あなたが、マスター？」

「そうじゃ。それで・・・わしに何の用じゃ？」

本当にマスターなのか疑わしいけど・・・
とりあえずこれまでのことを話してみた。
家の探索して地下を見つけたところから本を見たところまで。

「それで、ここのギルド？の前に倒れていたところをルーシィって子が運んだらしいわ」

「ふむ・・・」

全て話したところで、マスターは黙り込んで何かを考えているみたい。
家の探索とか言う必要なかったかな・・・

「・・・あくまでこれは仮説じゃが」

「・・・何？」

「・・・もしかしたら異世界から来たのかもしれんのぉ」

「は？」

・・・異世界？
そんなわけない。そんなの存在しないし。

「わしも信じられないが・・・ここにはニホンという国もトウキョウという場所も存在しない。逆におぬしはフィオーレ王国もマグノリアも知らんのじゃろ？」

「それはそうだけど・・・」

だからって、異世界？

「もしも、異世界というものが存在するならば、わし達の話が通じていることも説明がつくしのぉ」

「・・・」

たしかに。

ここが日本じゃないなら、なぜこの人たちと日本語で話せてる？

「・・・言葉が通じるのは、ここが異世界だから・・・？」

「そうかもしれん。仮説じゃがな」

・・・異世界。

今までそんなこと考えても見なかったけど・・・

そう言われてみると・・・無いとも言えないかもしれない。

もし異世界だったら、知らない国があっても当然だし。

ミラジェーンの髪の色とかもありえる。

でも・・・だとしたら・・・

「・・・仮にここが異世界だとして。どうやったら帰れるの？そもそも私はどうやってきたの？」

「どうやって帰るかは分からんが・・・ここに来たのはおぬしが言っていた本が関係してるかもしれん」

「・・・あの本が？」

「多分の。おぬし、その部屋で見つけたものをいくつかバックに入れたと言っておったな。それを見せてくれんか？」

あぁ、そういえば・・・

私のバックどこ？

「バックならさっきの部屋に置いてあるわ。ちょっと取って来る！」

数分して、ミラジェーンが戻ってきた。

その手にはちゃんと私のバックが握られてる。

「その中に部屋にあったものが入ってる。勝手に見れば？別にたいしたもの入ってなかったし、見られても困らない。」

わたしがそう言うと、二人ともバックをあけて中を見る。

・・・と、中を見たとたんに二人の動きが止まった。

「・・・どうしたの？」

「マスター・・・これって・・・」

「・・・ふむ」

なんか二人で深刻そうな顔をしてるけど・・・

まったく話が読めない。

「・・・いつまでも固まってないで、説明してくんない？」

いつまでも固まったまんまだから、ちょっと切れ気味に言う。

「おぉ、すまんのぉ・・・」

「あのね、あなたのバックに入っているものなんだけど・・・
全部あたし達の世界のものなのよ」

「・・・は？」

「例えばこれとかなんだけど・・・」

そう言ってミラジェーンが取り出したのは、地下で最初に見つけた眼鏡とペン。

「こっちは風詠みの眼鏡っていってね、品質にもよるけど２　―
３２倍の速度で本が読めるアイテム。
それでこっちは光筆（ヒカリペン）。空中に文字を書くことが出来るわ。
どちらも魔法を利用してるんだけど・・・」

「は！？魔法！？」

魔法って・・・

「ありえないでしょ」

「あなたの世界には魔法がないの？」

「ないわよ！魔法って言うのは物語の中でしかでてこないもの」

「でもここじゃあ魔法は普通よ？」

・・・ってことは、本当にここは異世界ってこと？

わたしのいた世界とはまったく別の、魔法のある世界・・・

だんだん頭が混乱してきた。元々わからない事だらけだったのに・・・・

いきなり魔法なんていわれたって・・・

あ・・・そういえば・・・

「中に水晶みたいなのがいっぱいあるでしょ？それは何なの？」

「あぁ、これね。魔水晶（ラクリマ）よ」

「・・・魔水晶？」

「そう。魔力を結晶化して普通の人でも魔力を使えるようにした物よ」

普通の人でもってことは、この世界でも誰もが魔法を使える訳ではないってことね・・・

「それじゃあ、わたしの左目も・・・？」

「左目？」

「そう。・・・これ」

左目にかかっていた髪をどけて、マスター達に見せる。

「ふむ・・・確かに魔水晶に似ておるの」

「・・・はっきりとは分からないの？」

「・・・現段階ではの。ポーリュシカに聞けば分かるかも知れん」

このじいさんは・・・

「あのね、誰よポーリュシカって」

「おぉ、すまんすまん。ポーリュシカはわしの知人でのぉ、治癒魔導士なんじゃ」

「魔導士って？」

ほんとに、わたしが来たばっかりだってこと、忘れてんじゃないの？

「魔導士っていうのは、魔法を使える人たちのことよ」

ってことはつまり・・・

「魔水晶は魔導士以外にも魔法が使えるようにした物ってことね」

「そうよ」

・・・で、あたしの左目が魔水晶かも知れないって事？

でも、何でそんな物が？

あたしの世界には魔法なんてなかったはずだし・・・

「それより・・・おぬしはこれからどうするつもりなんじゃ？」

「・・・は？」

「帰る方法がわからんのじゃぞ？」

・・・そういえばそうだった。
住むところとか、どうしよ・・・
っつーか、案外異世界とかいうこの状況を受け入れてる私って何なんだろうね・・・

「もしよかったら、フェアリーテイルに入らない？女子寮とかあるし、住むところも提供できるわ」

「フェアリーテイル？」

「この魔導士ギルドよ。あ、魔導士ギルドっていうのは魔導士達に仕事の仲介などをする組合のこと」

それぐらいわかってる。この人たち、無駄なところは説明するのね。

「魔導士たちのギルドなんでしょ？私が魔法を使えるとでも？ここに来たばかりなのに？」

「あ・・・」

本当にこの人たち馬鹿なのかしら。
はぁ、これからいろいろ探さないと行けないし、もう行くか。

「助けてくれたことには感謝するわ。ありがとう。それじゃ、私はもう行くから」

そういって、出口に向かう。すると途中で

「ちょっと待てい」

マスターに止められた。

まったく・・・

「まだ何か？」

早くしないと、一時も時間を無駄に出来ないっていうのに・・・

「おぬしが魔法を使える可能性は充分にあるぞ」

・・・は？どういうこと？

「・・・何を根拠に言ってんの？」

「・・・本にある魔法陣に触れたらここにとばされた。ということは魔法陣が発動したということじゃ」

たしかに、そうね。

「それに、おぬしの左目が魔水晶じゃった場合はそれを使うことも可能じゃ。ポーリュシカに見てもらえるしのぉ」

どうやらこのじいさん、そこまで馬鹿って訳じゃないのかも。

それに、住むところを提供してくれるって言ってるし・・・

「わかったわ。私もこのギルドに入る」

「ほんと！？」

「えぇ。それで、ここで何をしたらいいのかしら？」

「・・・とりあえず魔法を使えるかどうかで話は変わってくるから・・・明日ポーリュシカさんに見てもらうっていうのはどう？いいわよね、マスター？」

「わしはかまわん」

・・・ポーリュシカ、ね。

まぁ、この左目についてわかるならいいかもしれない。

「わかった。あしたそのポーリュシカって人に見てもらえばいいのね。じゃ、今日はもう寝る。つかれたし」

「あ、待って！ギルドのみんなにあいさつとか」

「いいわよそんなの。必要ないし。もう眠いの」

・・・まったく。ギルドの連中に挨拶してどーすんだよ。意味ないし。元々ギルドの連中と親しくする気なんてないし。

あ～あ、ほんと今日は疲れた。

明日は左目見てもらうのか・・・何かわかればいいけど・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4890n/

妖精の家族

2010年10月10日01時03分発行